

普濟寺版「五部大乘経」は「覆宋版」か(一)

―書誌的事項からの検討―

佐々木 勇
(受理日二〇二二年十月七日)

一、本稿の対象資料と先行研究

1. 本稿の対象資料

本稿の筆者は、宋版一切経が日本に与えた影響を研究し、いくつかの論考を発表してきた。その中で、鎌倉後期に開版された春日版「五部大乘経」が、以下の宋版を覆刻したものであることを指摘した。

『大方広仏華嚴経』『大方等大集経(日藏経・月藏経を含む)』『摩訶般若波羅蜜経』『大般涅槃経後分』―思溪版。
『大般涅槃経』―東禪寺版補刻本。

ただし、春日版は、宋版の本文に基づけばかりでなく、日本古写経系本文による改訂を加えていることも知られた。春日版「五部大乘経」は、新来の宋版一切経を全面的・無批判に摂取したのではない。依拠する宋版の経本文を選択し、日本古来の経本文をも採用して、印本を作成した。

本稿では、春日版「五部大乘経」刊行後の日本刊本「五部大乘経」として知られている、武州普濟寺版を採り上げる。普濟寺版は、貞治二年(一三六三)以来約四十年間に亘って開版された。

本稿の対象とする普濟寺版は、現時点で知り得、原本調査できた以下の諸卷である。ただし、後世の補写卷(『摩訶般若波羅蜜経』卷第二十一〜三十、『大方等大集経』卷第十四・十五・十七〜二十、『大方広仏華嚴経』卷第三十一)は対象外とする。

原本閲覧させて頂いた普濟寺・東洋文庫・大東急記念文庫・阪本龍門文庫・京都大学附属図書館、画像公開して下さっている東アジア人情報学研究センター・国文学研究資料館、閲覧のお世話を頂いた玄武山普濟寺・弓場重典御住職、立川市歴史民俗資料館・浦島利浩氏、並びに諸機関閲覧担当係の皆様には、本稿を起すに当たり、心よりの御礼を申し上げます。

○摩訶般若波羅蜜経 全三十卷(東洋文庫蔵本・貴二Cp240)。
○大方等大集経 全三十卷(立川普濟寺蔵本)、卷第二十九(阪本龍門文庫326番)。
○大乘大方等日藏経 全十卷(東洋文庫蔵本・貴二Cp-110)、卷第三(阪本龍門文庫325番)。

○大方等大集月藏経 全十卷(東洋文庫蔵本・貴二Cp150)。
○大方廣佛華嚴経 卷第一〜第五(東洋文庫蔵本・貴二Cp230)、卷第六(大東急記念文庫蔵本1071)、卷第七(東アジア人情報学研究センター・松本文庫蔵本)、卷第十一〜十五(大東急記念文庫蔵本1071)、卷第二一〜二五(京都大学附属図書館蔵本)。1.23〜10貴・登録番号17501)、卷第二六二二八〜三〇(大東急記念文庫蔵本1071)、卷第三一・三七〜四〇(京都大学附属図書館蔵本)。1.23〜10貴・登録番号17501)、卷第四十五(国文学研究資料館)、卷第五十六〜六十(東洋文庫蔵本・貴二Cp130)。

龍門文庫蔵の『大方等大集経』卷第二十九と『大乘大方等日藏経』卷第三以外には、永享五年(一四三三)三月二十三日に上杉憲直が鎌倉鶴岡八幡宮に奉納した旨を記した奥書が存し、一揃いのものであったことが知られる。

龍門文庫蔵「大方等大集經」卷第二十九・同蔵「大乘大方等日藏經」卷第三には、この奉納奥書が見られない外、この二巻のみ、卷子装である。各巻の装丁については、後述する。

これらの外、目録類に「普濟寺版」と記されているものの、普濟寺版とは認められないものも存する。²⁾

現時点で、次の二巻の全頁画像が公開されている。³⁾

『大方廣佛華嚴經』卷第七・同卷第四十五

卷第七は東アジア人文情報学研究所センターの「東方學デジタル圖書館」で、卷第四十五は国文学研究資料館「館蔵和古書目録DB」および「新日本古典籍総合DB」で、全頁カラー画像がインターネット公開されている。

しかし、国文学研究資料館蔵「大方廣佛華嚴經」卷第四十五については、従来の普濟寺版研究において、まったく言及されていない。

2. 普濟寺版についての先行研究

A. 日本刊本の覆刻であるとする説

川瀬一馬「古写経と古版経」〔大東急記念文庫貴重書解題仏書之部〕(一九五六年、大東急記念文庫)所収)は、「南北朝」の項で、「五部大乘経は、鎌倉時代から信仰するものが多く、その末期には南都版系統の開版にも、宋版を覆刻した一本が現はれた程で、この時代にも武州立川の普濟寺で光信尼が春日版の覆刻風のものを開版してゐる。」と、普濟寺版を「春日版の覆刻風」とした。

嗣永芳照「武蔵普濟寺版考」〔仏教史学〕14(3)、一九六九年五月)も、「普濟寺版は、地方的ながらも寛裕にして雅味ある版であり、覆宋版とみるより、日本的な鎌倉版の匂を多く有するようである。」と記す。

また、白石克「中世武州御岳山の勧進活動——「五部大乘経」出版の場合」〔帝京史学〕18、二〇〇三年二月)5頁も、「鎌倉時代から室町時代まで度々刊行されている」日本の刊本「五部大乘経」について、次のように言う。

いずれも『華嚴経』『大方等大集経(日藏・月藏共)』『摩訶般若経』の三経は南宋思溪版「大藏経」、『大般涅槃経』は北宋東禪寺版「大藏経」所収本の各覆刻であることがわかった。全て底本の組み合わせが一致しているの
で、各版は宋版を各々直接覆刻したのではなく、先行する和刻の覆宋版「五部大乘経」を底本にして、刊行したことがわかる。

以上、普濟寺版について、川瀬は「春日版の覆刻風」、嗣永は「日本的な鎌倉版」、

白石は「和刻の覆宋版」「五部大乘経」を底本にして、刊行した」と述べた。

B. 宋版の覆刻であるとする説

ところが、白石克は、「現存立川普濟寺版について」〔書誌学〕18号、一九七〇年二月)では、普濟寺版「大方廣佛華嚴經」卷第五十八に、「福州東禪寺版刻記がそのまま本文に、左の如くはさまれてゐる。」として、普濟寺版「大方廣佛華嚴經」卷第五十八における左の刻記を引用した。

已上一段五紙餘經自東晉義熙年覺賢禪師翻譯之後傳寫之人脱落也歷涉朝代補綴攸闕聖宋元祐年福州等覺禪院開大藏經印板方撿唐垂拱年中天竺國日照法師續法界品及于闐法師實叉難陀新經較勘合入實文理接續法實無缺矣

その上で、これを根拠に、「この刻記は大正蔵の注記では、宋版にあるといふことが記されてゐるので、この普濟寺版は福州東禪寺版を底本としたものと思はれる。」と記した。

高田智和「普濟寺版の漢字字体」(国立国語研究所シンポジウム「字体資料共有の現在と未来」二〇二一年三月二十日)発表資料も、右の白石論文を引用しつつ、「普濟寺版(京都大学附属図書館所蔵大方広華嚴経卷第四十の經典本文)の漢字字体の使用傾向は、宋版に似ている。」「普濟寺版は、宋版を介した日本への開成石経標準字体移入の一経路である。」とした。普濟寺版の漢字字体が宋版のそれに似ていることは、高田(二〇二二)の指摘のとおりである。普濟寺版および宋版の公開画像(宮内庁書陵部取蔵漢籍集覧等)で確認願いたい。

ただし、春日版「大方広華嚴経」の字体も、宋版の漢字字体に似ている。

川瀬一馬も、「五山版の研究 上巻」(一九七〇年、日本古書籍商協会)一八四頁・同「石井積翠軒文庫善本書目本文篇」(一九八一年、臨川書店)一三三頁・同「龍門文庫善本書目」(一九八二年、阪本龍門文庫)217頁・「日本書誌学用語辞典」(一九八二年、雄松堂出版)二四四頁では、普濟寺版を、「覆宋刊本」「宋版を以て覆刻したもの」「宋版に基づいて覆刻を行ったもの」としている。

二、本稿の目的

右に見たとおり、従来の研究では、普濟寺版を春日版等と刻本の覆刻であるとする説と、直接の覆宋版であるとする説との両説がある。

覆宋版説の根拠の一つである「已上一段五紙餘経(中略)聖宋元祐年福州等覺禪院開大藏経印板(以下略)」の割り注は、東洋文庫藏普濟寺版『大方廣佛華嚴経』卷第五十八に確かに存する。しかし、宋版一切経東禪寺版そのものの該当部分の外、開元寺版にも思溪版にも春日版にも、同一箇所同文の割注が存在する。よって、この割注の存在は、普濟寺版が東禪寺版に依拠した根拠にはならない。

なお、同一人が両説を唱えているように見えるため、あるいは、普濟寺版を「宋版を以て覆刻したもの」とする類の記述は、「宋版を以て覆刻した和刻本の覆刻本」と同じ意味の、省略表現なのかも知れない。

しかし、判然としない。
普濟寺版は、宋版または春日版を参照しつつ、独自の版本を作成したものである可能性も存する。

本稿は、普濟寺版「五部大乘経」における宋版および春日版の影響について、調査・考察することを目的とする。

三、研究方法

本稿の目的達成のためには、普濟寺版と春日版「五部大乘経」および春日版が底本とした宋版思溪版とを比較するより外に方法は無い。

思溪版と春日版とは、小異が存する。よって、思溪版・春日版と普濟寺版の三者を比較すれば、普濟寺版がいずれに依拠したのかを決定できる。

四、三者の比較

1. 思溪版と春日版との相違点

佐々木勇「春日版『五部大乘経』の底本とされた宋版一切経(三)——釋音の比較による検討と宋版との相違点——」(広島大学大学院教育学研究科紀要、第二部 文化教育開発関連領域「66号(二〇一七年十二月)に依れば、思溪版と春日版とで異なる主な点に、左の諸点がある。

- 一板の行数、版面の大きさ、紙幅、天地の界線、内題・尾題下の千字文、柱刻、卷末刻板数、卷末刊記、刻工名、捨錢刊記、卷末総字数記、卷末釋音、日本古写経系本文による経本文の校合・改訂。

以下、これらについて、宋版一切経思溪版および春日版「五部大乘経」と普濟寺版とを、項目に分けて比較する。

2. 思溪版と春日版との相違点における普濟寺版の実態

2. 1. 装訂

宋版一切経思溪版は、折本の帖装である。これは、宋版一切経東禪寺版・開元寺版の装訂を引き継ぐものである。六行一面として折ることを想定し、六行ごとに他行間よりは広い行間が製版時点で設けられている。

春日版『大方広華嚴経』『大方等大集経』『摩訶般若波羅蜜経』は、右の思溪版に基づいたため、六行ごとにやや広い行間を持つ。この春日版「五部大乘経」は、もと卷子装であったものを、折本に改装しているものが多い。

普濟寺版も、原装は卷子装であった。龍門文庫藏『大方等大集経』卷第二十九・大乘大方等日藏経』卷第三は卷子装であり、原装を伝える。卷子装でありながら、思溪版・春日版同様、六行ごとに若干広い行間が取られている。それが、龍門文庫藏の二巻以外は、折本に改装されている。

原装が卷子であった点は、普濟寺版は春日版と等しい。また、宋版東禪寺版・開元寺版および思溪版の初印本と言われる長滝寺藏本等には、帙表紙がある。しかし、後印本とされる岩屋寺本(旧高山寺藏本)等の思溪版には、帙表紙が無い。

本来卷子装であった春日版および普濟寺版にも、各帖の帙表紙は無い。この点も、普濟寺版は春日版と同じである。

2. 2. 法量

各本の法量は、次のとおりである。¹⁾

【東禪寺版】

縦 二九.五cm、折幅 約一一.五cm。

一紙長 六七.五cm。

天地横罫・高さ 二四.八cm。

一板・一紙六面三十六行、每半折六行、一行十七字。

【思溪版】

縦 約三〇.〇cm、折幅 一一.五cm。

一紙長 約五六.〇cm(『大方広華嚴経』六十巻以外)。

一紙長 約六六・五cm (『大方広仏華嚴經』六十卷)。
 天地横罫・高さ 二四・四cm。

一板・一紙五面三十行、毎半折六行、一行十七字 (『大方広仏華嚴經』六十卷以外)。ただし、『大般涅槃經後分』は一行十八字。

一板二紙六面三十六行、毎半折六行、一行十七字 (『大方広仏華嚴經』六十卷)。

【春日版】

縦 約二八・〇cm、折幅 約九・五cm。

一紙長 約四二・〇cm。

天地横罫 (ナシ)。

一板六面三十六行、毎半折五行、一行十七字。

【普濟寺版】

縦 約二七・七cm (龍門文庫蔵『大方等大集經』卷第二十九)。

縦 約二八・五cm (龍門文庫蔵『大乘大方等日藏經』卷第三)。

縦 約二七・〇cm、折幅約九・五cm (右二本以外の折本)。

一紙長 約四二・〇cm。

天地横罫 (ナシ)。

一板六面三十六行、毎半折五行・龍門文庫蔵本は卷子、一行十七字。

まず、紙高は、宋版よりも、春日版・普濟寺版が1cmほど低い。普濟寺版の紙高が春日版よりやや低いのは、卷子を帖装に改装した際に天地を切りそろえたためであろう。

板毎に一板一紙で印刷する宋版東禪寺版・開元寺版および思溪版『大方広仏華嚴經』の一紙(一板六面)幅は七十cm弱、『大方広仏華嚴經』以外の思溪版(一板五面)は五十六cm程度である。

他方、春日版の一紙長は、約四十二cmである。春日版は、写経と同じく、紙を継いでから印刷する日本の経版本の伝統を引き継いでいる。

普濟寺版の一紙長も、春日版同様、約四十二cmである。紙を継いだ後に印刷したため、紙の継ぎ目に文字が跨っていることも、春日版に等しい。

なお、春日版も普濟寺版も、宋版同様、一板を六行の纏まりごとに六つの纏まり三十六行で彫っている。それを、春日版・普濟寺版の多くの現存本は、五行で折る。これは、紙高が宋版の紙高よりも短かったため、それとのバランスを取ったためかもしれない。それ故、春日版・普濟寺版の折本は、宋版よりも

一回り小さい。

2. 3. 一板の行数

右項に記したとおり、宋版一切経思溪版は、六行の纏まり六つ計三十六行一板を基本とする東禪寺版および開元寺版とは異なり、六行の纏まり五つ、計三十行一板を基本とする。ただし、思溪版でも、旧約『大方広仏華嚴經』全六十巻は、一板六面三十六行である。

春日版「五部大乘経」は、比較的多くの經典底本とした思溪版における主たる版式である一板五面三十行に従わず、全経等しく、六行の纏まり六つ計三十六行で一板を成す。

普濟寺版も、右項に記したとおり、『大方広仏華嚴經』『大方等大集経』『摩訶般若波羅蜜経』のすべて、一板三十六行である。この点、思溪版ではなく、春日版と一致する。

2. 4. 版面の大きさ

文字面の大きさを測ってみる。

東禪寺版・開元寺版および一板六面の思溪版は、一板六面の文字面横は、約六十六cmである。字面高は、約二十五cmである。

これに対して、おなじく一板六面である春日版は、文字面幅約六十五cm、字面高は約二十三〜四cmで、版面が宋版よりもやや狭い。

普濟寺版は、版心から次の版心までの長さの字面幅は約六十五cmで、春日版とほぼ等しい。字面高も、約二十三〜四cmで、春日版に近い。

2. 5. 天地の界線

東禪寺版・開元寺版・思溪版の宋版一切経には、天地に横の墨界線が存する。しかし、春日版五部大乘経には、平安後期以降の伝統的な春日版の書式を継承し、それが無い。

普濟寺版も、春日版と同じく、天地の界線は存しない。

2. 6. 内題・尾題下の千字文

宋版一切経は、内題・尾題下に千字文号が彫られる。宋版に基づく日本古写経も、その千字文を写すことがあり、それが底本推定の手がかりとなる。

一切経の函ごとに振った千字文は、一切経から五部大乘経を抜き出した春日版・普濟寺版には無用である。それどころか、十巻を一帙とした春日版・普濟寺版においては、かえって混乱を招く。

それにもかかわらず、春日版五部大乘経は、宋版の千字文を梵字に変更した帖が存するものの、基本的には、底本である宋版の千字文を内題・尾題下に彫る。

一方、普濟寺版は、千字文を彫る巻が限られている。

現存する普濟寺版の内題下千字文は、『摩訶般若波羅蜜經』卷第十二の「海」と、龍門文庫蔵『大乘大方等日藏經』卷第三の「虞」のみである。

しかも、東洋文庫蔵『大乘大方等日藏經』卷第三には、内題下に千字文は無い。

後項で見る刊記は、龍門文庫蔵『大乘大方等日藏經』卷第三に無く、東洋文庫蔵同巻には、「貞一欠筆一治(亨)未(六年)四月 日 願主比丘光信 同願比丘如見」の刊記が刻雕されている。『摺刷よろしく、初印と認められる』とする『龍門文庫善本書目』の川瀬の言が当たっていれば、東洋文庫蔵本は、初版板木の千字文を削り、刊記を埋めた板木から摺り出されたか、別板の摺本である。

なお、この思溪版『摩訶般若波羅蜜經』卷第十二・『大乘大方等日藏經』卷第三に存する内題下千字文を、春日版は梵字に変更している。

また、尾題下には、つぎの千字文が刻されている。

『摩訶般若波羅蜜經』卷第十二・十八〜二十一千字文「海」。

『大方等大集經』卷第八〜十一千字文「讓」。

(同右) 卷第二十五〜二十七千字文「有」。

『大乘大方等日藏經』龍門文庫蔵卷第三千字文「虞」。

『大方等大集月藏經』卷第七千字文「陶」。

『大乘大方等日藏經』卷第三は、尾題下の千字文も、龍門文庫蔵本には有り、東洋文庫本には無い。

右の千字文は、思溪版および春日版のそれと一致する。春日版が漢字千字文として残した思溪版千字文の一部を彫ったとも考えられるし、思溪版の尾題千字文のごく一部を刻雕した、とも考えられる。尾題千字文には、内題千字文で見られた、春日版が梵字で、普濟寺版が漢字である千字文は存しない。

2. 7. 柱刻の位置

宋版思溪版の六十巻本『大方広仏華嚴經』は、東禪寺版・開元寺版と同じく、一板三十六行の六行目と七行目との間(一板三十六行の第一の纏まりと第二の

纏まりとの間)に柱刻(版心記)を彫る。

春日版「五部大乘経」の柱刻も、六行目と七行目との間に彫られる。

一方、普濟寺版の柱刻位置は、一定しない。

たとえば、画像公開されている普濟寺版『大方広仏華嚴經』卷第七では、画像から知られるとおり、第一板から最終第十六板まで一貫して、第十八行と第十九行との間(三つ目の六行の纏まりと四つ目の六行の纏まりとの間)に柱刻が存する。

ところが、同じ『大方広仏華嚴經』の卷第六では、第一板・第十五板と最終第十六板に柱刻は無く、第二板〜第六板までは十二行目と十三行目との間、即ち、二つ目の六行の纏まりと三つ目の六行の纏まりとの間に刻雕される。

また、普濟寺版同経卷第十一は、卷第六と同じく、十二行目と十三行目との間に柱刻を彫る。が、第四板のみ、一纏まりずれ、十八行目と十九行目との間に柱刻が存する。第五板の柱刻は、十二行目と十三行目との間に刻されているので、第四板と第五板との柱刻の間は、三十行となる。第三板と第四板の柱刻の間は、四十二行である。

右のとおり、普濟寺版の柱刻位置は、同一經典においても巻ごとに異なり、同一巻内でも、板によって動く。

この点は、思溪版とも春日版とも、普濟寺版は異なる。

2. 8. 柱刻の内容

宋版と春日版の柱刻内容は、両者を比較する形で別稿に記した。よって、ここでは具体例の掲載を省略する。

普濟寺版の柱刻も、柱刻の基本的事項である、経名・卷数・板数を記すことは、宋版・春日版と変わらない。

これらに加えて、普濟寺版の柱刻には、喜捨した人名・地名等が記される。そのため、地方の文化史資料として早くから注目され、翻刻もされてきた。普濟寺版柱刻の記載内容については、それらの先行研究に譲る。

この柱刻の記入内容は普濟寺版の特徴であり、思溪版とも春日版とも異なる。ただし、刻工名は、柱刻の経名・卷数・板数の下ではなく、経文の余白に刻彫される。この点、宋版や春日版と異なる。

たとえば、画像公開されている『大方広仏華嚴經』卷第七では、公開画像2/32の九行目と十行目との間下方に「工師源盛彫之」と刻工名を刻す。

柱刻は、その先、十五行目と十六行目との間に、「花七一男壽阿經阿並所屬各人」と彫られる。

なお、『摩訶般若波羅蜜經』卷第三の第二板柱刻は「一三二」、第三板は「一三三」、第四板は「一三四」、第五板は「大品三五」、第六板以降も「大品」と記される。これによって、「大品般若經（摩訶般若波羅蜜經）」が普濟寺版五部大乘經の初めであることが知られる。宋版一切經の千字文の順に並べれば、64畫から始まる『摩訶般若波羅蜜經』が先頭に來るためであろう。以下、90位『大方等大集經』・94虞『大乘大方等日藏經』・95陶『大方等大集月藏經』・105坐『大方廣佛華嚴經』の順となる。

また、『摩訶般若波羅蜜經』卷第十九の第五板と第六板には、2.6で述べた宋版の千字文「海」を彫ろうとしたと見られる柱刻が有る。ただし、日偏と糸偏に作られる（第五板「晦 十九卷 五」・第六板「晦 六」）。

2.9. 卷末刻板数

春日版五部大乘經には、実板数と一致しない底本宋版の卷末板数を、宋版に記されたまま彫った例が有る。たとえば、春日版『摩訶般若波羅蜜經』卷第七は、全十四板であるのに、卷末には「十七紙」と彫られている。これは、一板五面三十行の思溪版の卷末紙数を写したものである。

また、中に、宋版の板数ではなく、春日版の実質板数を卷末に刻したものが存する。たとえば、一板六面で通されている春日版『大方等大集經』卷第十五は、春日版の最終板数「十九」を卷末に刻す。この卷末板数「十九」は、思溪版当該帖には見られない。思溪版『大方等大集經』卷第十五は、全三十二板である。普濟寺版の現存本には、このような卷末板数の記載は、一切見られない。この点、普濟寺版は、宋版からも春日版からも、距離を置いている。

2.10. 卷末刊記

春日版五部大乘經は、底本とした宋版に存する卷末刊記をまったく刻雕していない。

普濟寺版も、春日版と同じく、宋版の卷末刊記を彫ることは無い。

普濟寺版の刊記（同願主比丘 光信 祖榮誌之 貞一欠筆 治二癸卯八月六日始之等）は、先行研究に翻刻済みであるため、ここに繰り返さない。

ここでは、呼称「普濟寺版」の根拠である『大方等大集經』最終卷第三十の

卷末刊記のみ、引用する。

此經印版今世幾希也仍發心／募衆而刊行之憑茲善利法界／衆生同圓種智／

至德丙寅臘月日化主光信謹識／版留武州立川縣玄武山普濟禪寺

現存本中、最も早い刊記は『大方広華嚴經』卷第一の貞治二年（一三六三）八月であり、最も遅い刊記は『摩訶般若波羅蜜經』卷第十の応永七年（一四〇〇）五月である。

この刊記は、釈音が有ればそれに続けて、釈音が無い巻では尾題の次行に、二・三字分下げ、「應安（甲寅）七年十二月 日 化主比丘光信」（『大方等大集經』卷第二）等と記すのが通常の位置である。ただし、尾題下（『大方等大集經』卷第二十四・『大方廣佛華嚴經』卷第二十二）や釈音最終行末の空白部分（『大方等大集經』卷第二十）に彫られる巻も有る。

この普濟寺版刊記の年月から知られる彫刻順は、105坐『大方廣佛華嚴經』・94虞『大乘大方等日藏經』・95陶『大方等大集月藏經』・90位『大方等大集經』・64畫『摩訶般若波羅蜜經』となり、千字文順とは異なる。

2.11. 刊記と柱刻の欠筆

先行研究において、普濟寺版『大方等日藏經』と『大方等月藏經』の卷末刊記年号「貞治」における「貞」の最終画を欠筆にすることが指摘されている。⁹⁾

この欠筆は、画像公開されている『大方廣佛華嚴經』卷第七（東方學デジタール図書館）卷末刊記年号「貞治」の「貞」でも、目視できる。

現存本のうち、普濟寺版に貞治の刊記が確認できるのは、全十八巻である。そのうち、「貞」を欠筆としているのは、左の十一巻である。

『大方広仏華嚴經』卷第一・三・五・七（貞治二年（一三六三）・三年）

『大乘大方等日藏經』卷第一〜六（貞治五年五月・六年）

しかし、次の七巻における刊記の「貞」は、欠筆にしていない。

『大方広仏華嚴經』卷第十三・十四・二十一〜二十五

（貞治四年・五年正月）

右のとおり、刊記の「貞」を欠筆とすることを、貞治四年から五年正月までは中断している。

また、柱刻の人名の「貞」を欠筆とする例も、指摘できる。ただし、刊記「貞治」の「貞」を欠筆にする巻でも人名の「貞」は欠筆にしない板もあり、應安（一三六八—一三七五年）刊本で人名「貞」を欠筆とする巻も存する。

柱刻の人名における「貞」を欠筆とするのは、左のものである。

『大方広華嚴經』卷第六第二板「貞盛」、『大乘大方等日藏經』卷第一(応安元年刊)第一板・二板「貞阿」、第十五板「女如貞」、『大方等大集月藏經』卷第十(応安五年刊)第七板「男貞阿」。

「貞」の欠筆は、中国では、北宋第四代皇帝(在位一〇二二—一〇六三)趙禎の名を記すことを避けたもので、仏典には希な欠筆例である。²⁰⁾

普濟寺版には、思溪版・春日版に類出する、北宋初代太祖の祖父・趙敬の「敬」を欠筆とした例は、ごく限られている(本文の欠筆については、次号で触れる)。

ゆえに、普濟寺版が欠筆とする刊記の「貞治」と柱刻人名の「貞」は、貞治以前における日本の人名・諱に含まれる漢字であった可能性が高い。²¹⁾

五、結び

本稿の目的を、普濟寺版「五部大乘經」の開版における宋版および春日版の影響について調査・考察することと定め、項目を分けて整理してきた。

本稿で調査した普濟寺版の実態を、分類して記すと次のとおりとなる。

- ① 春日版と一致し、思溪版と一致しない項目
1. 装訂、2. 法量、3. 一板の行数、4. 版面の大きさ、5. 天地の界線
- ② 思溪版と一致し、春日版と一致しない項目
6. 内題下の千字文
- ③ 思溪版・春日版のいずれとも一致しない項目
7. 柱刻の位置、8. 柱刻の内容、9. 卷末刻板数、10. 卷末刊記、11. 刊記と柱刻の欠筆

右のごとく、②思溪版と一致し、春日版と一致しない項目は、「内題下の千字文」しか無い。しかも、普濟寺版の内題下千字文「海」(『摩訶般若波羅蜜經』卷第十二)・「虞」(龍門文庫藏『大乘大方等日藏經』卷第三)も、春日版の梵字千字文を漢字に直した、とも考えられ、普濟寺版同巻尾題下千字文の「海」・「虞」に合わせたとも考えられる。よって、これを、普濟寺版が思溪版に依拠したことの根拠とはできない。

したがって、本稿の調査結果は、従来の研究が、普濟寺版は「春日版の覆刻風」としていた説を支持する。

しかし、「③思溪版・春日版のいずれとも一致しない項目」が、少なからず存

した。普濟寺版は、思溪版から遠く、春日版とも完全には一致しない。

よって、貞治年間に、日本武州において新たな「五部大乘經」を開版しようとしたこととなる。

これこそが、「五部大乘經」開版の動機・目的であり、多くの民衆の勧進を集める力となったものである、と考えられる。

紙幅の都合で触れられなかった、経本文と卷末釋音における経文異同および本文の漢字字体等についての検討結果は、本紀要の次号に記す。

【注】

- (1) 佐々木勇「春日版「五部大乘經」の底本とされた宋版一切経(一)——刊記の比較による検討——」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域) 64号、二〇一五年十二月、同「春日版「五部大乘經」の底本とされた宋版一切経(二)——本文の比較による検討——」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域) 65号、二〇一六年十二月、同「春日版「五部大乘經」の底本とされた宋版一切経(三)——釋音の比較による検討と宋版との相違点——」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域) 66号、二〇一七年十二月。同「春日版「五部大乘經」本文と底本選択理由」(『日本古写經研究所研究紀要』2号、二〇一七年三月)。なお、ここで鎌倉時代後期に開版された愛媛県伊予郡砥部町満穂光明寺藏本・樹下神社藏本の「五部大乘經」を「春日版」と呼ぶのは、その可能性が高いとされていることによる便宜的な呼称である。本稿でも、これを「春日版」と呼ぶ。
- (2) たとえば、『倭成図書館善本目録』(一九九五年、倭成図書館)の0817『大方広華嚴經』卷第十および0828同経卷第十二には、「広峯宮(播州)の印記あり版経(立川普濟寺版)」と記されている。しかし、卷第十には柱刻に千字文「坐」が、卷第十二には内題下に千字文「坐」が彫られており、巻頭に有る訳者名の位置が高い、両巻とも喜捨した助縁者・刻工・願主名がまったく見られないなど、普濟寺版と異なる点が存する。

後世の補写経卷は、『新編立川市史 資料編 古代・中世』(二〇二〇年、立川市)を参照願いたい。

(3) なお、京都大学附属図書館藏普濟寺版すべての全頁画像を、京都大学貴

重資料デジタルアーカイブにて、今年度中に公開してくださるとのことである。

- (4) 東禅寺版は、小林芳規「醍醐寺藏宋版一切経解題」〔醍醐寺藏宋版一切経目録第一冊〕(二〇一五年、汲古書院)、思溪版は「豊山長谷寺拾遺 第四輯之一」(二〇一一年、元興寺文化財研究所)、春日版は土居聡朋「愛媛県伊予郡砥部町光明寺所藏・版本五部大乘経について ―元版覆刻和版五部大乘経の一事例として―」〔愛媛県歴史文化博物館研究紀要〕第十二号、二〇〇七年三月)の記述を参照し、いずれについても、原本によって確認した。

- (5) 詳しくは、注(4) 土居論文を御覧いただきたい。

- (6) 山本信吉「宋版一切経」〔奈良六六寺大観唐招提寺〕(一九七二年、岩波書店) 102頁、同「貴重典籍・聖教の研究」(二〇一三年、吉川弘文館) 三五五頁、参照。

- (7) 思溪版においても、第一秩千字文「天」より始まる『大般若波羅蜜多経』巻第一―巻第二百二十まで、および、千字文「坐」(第百五帙)より始まる旧約『大方広華嚴経』全六十巻は、一板六面三十六行である。『奈良県大般若経調査報告書―本文篇』〔同〕資料篇1―(一九九二年、奈良県教育委員会)、牧野和夫「關於宋版大藏経中―一版五半葉三十行、版片的考察」〔藏外佛敎文献〕第十四輯、二〇一〇年八月、同右「高野山金剛峯寺藏『四分律藏』(宋版大藏経ノ内)について」〔かがみ〕第四十二号、二〇一二年三月)、『豊山長谷寺拾遺第四輯之一宋版一切経』(二〇一一年、佐々木勇「宋版一切経思溪版の版式転換―一紙六面から一紙五面へ―」〔いとくら〕10号、二〇一五年三月)、参照。

- (8) 白石克「現存立川普濟寺版について」〔書誌学〕18号、一九七〇年二月)、同「現存普濟寺版について(追録)」〔書誌学〕19号、一九七〇年五月)、佐々木勇「春日版「五部大乘経」の底本とされた宋版一切経(三)―釋音の比較による検討と宋版との相違点―」〔広島大学大学院教育学研究紀要、第二部 文化教育開発関連領域〕66号、二〇一七年十二月)、参照。

- (9) 佐々木勇「尊氏願経と宋版一切経思溪版」〔Museum〕659、二〇一五年十二月)、同「足利尊氏願一切経の底本」〔かがみ〕第四十六号、二〇一六年三月)、同「北野経王堂一切経(北野社一切経)の底本(一)―主たる底本―」〔広島大学大学院教育学研究紀要、第二部 文化教育開発関連領域〕68号、二〇一九年十二月)、等参照。

- (10) たとえば、全三十巻の『大方等大集経』を、宋版思溪版は巻第一―第七(千字文90位)、第八―第十五(千字文091護)、第十六―第二十二(千字文092國)、第二十三―第三十(千字文093有)と、七巻・八巻・七巻・八巻の計全三十巻に四分割する。したがって、思溪版と同じ千字文を入れ十巻一帙にまとめたのでは、異なる千字文を刻された経巻が同帙に入ることになる。

- (11) 注(4) 土居論文に指摘がある。

- (12) ただし、龍門文庫蔵『大方等大集経』巻第二十九の内題下に、千字文「有」の墨書が見られる。

- (13) 龍門文庫蔵本・東洋文庫蔵本ともに複写が難しく、両本の対照がただちにできない。再調査の機会を得たい。

- (14) 白石克「現存立川普濟寺版について」〔書誌学〕復刊新18号、一九七〇年二月) 7頁上段は、柱刻の間隔を、「ほぼ三十六行間隔(稀に三十行)、或は四十八行間隔もある」とした。これは、板木の長さ(稀に三十行)ではなく、もちろん、無い。版心記(柱刻)を彫る位置が、板によって異なることによる異同である。

- (15) 佐々木勇「春日版「五部大乘経」の底本とされた宋版一切経(三)―釋音の比較による検討と宋版との相違点―」〔広島大学大学院教育学研究紀要、第二部 文化教育開発関連領域〕66号、二〇一七年十二月)、参照。

- (16) 注(8) 白石論文、「新編立川市史 資料編 古代・中世」(二〇二〇年、立川市)。左に、「大方廣佛華嚴経」巻第四十五を除く現存本の柱刻を翻刻している「新編立川市史 資料編 古代・中世」の翻刻を修正する。刊記・識語も、ここで併せて訂正する。

- 『大方広華嚴経』巻第一〔刊記〕「志之」↓「誌之」、同巻第二十一板「妙美」↓「妙英」、『大乘大方等日藏経』巻第六第五板「次郎左衛門」↓「二郎左衛門」、『大乘大方等月藏経』巻第六・卷第十〔刊記〕「光用」↓「光由」、同巻第八第一板柱刻「比丘」↓「比丘尼」、『大方等大集経』巻第二第五板柱刻「金井」↓「金井女」、『摩訶般若波羅蜜経』巻第六〔識語〕「永享五年」↓「永享五年(癸丑)」、同巻第八・九〔識語〕「于時惣奉行」↓「惣奉行」、同巻第十三第十四板「摩訶般若 十三 十四」↓「十三 十四」。なお、『大方廣佛華嚴経』巻第四十五の柱刻は、国文学研究資料館データベースの鮮明な画像で確認いただきたい。

- (17) 「版木を彫った工師名の方は、一定せず区々である。」「普濟寺版について」

- 〔立川市史〕一九六八年、立川市〕六四五頁〕と述べられる通りである。
- (18) 佐々木勇「春日版『五部大乘經』の底本とされた宋版一切経(二)——本文の比較による検討——」〔広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域〕65号、二〇一六年十二月、参照。
- (19) 白石克「現存立川普濟寺版について」〔書誌学〕18号、一九七〇年二月、同「現存普濟寺版について(追録)」〔書誌学〕19号、一九七〇年五月。
- (20) 川瀬一馬『五山版の研究 下巻』四九頁・図版98として掲げられる宋代・晁登撰『感山雲臥紀談』貞和二年(二三四六)刊本の「貞和」の「貞」が欠筆にされているように見える。これが欠筆であれば、日本において「貞」を欠筆とした類例となる。
- (21) 今は、その人名を特定できない。ご教示願いたい。

Was Original Text of Fusaiji Prints (普濟寺版) the Five Volumes of Mahayana Sutras (五部大乘經) Printed Based on the South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon (宋版一切經) ? (1)
— The thing understood by bibliographic inscriptions —

Isamu Sasaki

Abstract: The Five Mahayana Sutras (Hoke-kyo (法華經), Kegon-kyo (華嚴經), Nehan-kyo (涅槃經), Daijik-kyo (大集經), Daibon hannya-kyo(大品般若經)) were printed at Musashi country in Nanbokucho period. Those were called Fusai-ji edition (普濟寺版). The purpose of this paper is to check whether Fusai-ji edition is based on South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon. The next was understood by consideration of this thesis. 1. The Fusai-ji edition is not directly based on the South Song dynasty edition. 2. The Fusai-ji edition refers to the Kasuga prints. 3. The Fusai-ji edition has its own items. This thesis continues after a next issue.

Key words: the text of Fusaiji prints, the south song dynasty edition of the buddhist canon,
the text of Kasuga prints, the five volumes of Mahayana Sutras

キーワード: 普濟寺版, 宋版一切經, 春日版, 五部大乘經